

本から育つ能動的な都市生活—知の氷柱
～神保町都市更新計画～

都市空間生成研究室
1541006 射和 沙季

神保町 古書店街 都市更新計画
滲み出し 増築 専門店街

1. 研究の目的と背景

世界最大の古書街であり、「本の街」と呼ばれ、現在も戦前から変わらず多様な古書店が集積している歴史的な専門店街である。しかし神田神保町も例外ではなく、web販売数が増加しているのに対して来客数や全体の売上げが減少している。^{*1} さらに、古書店の多くは家族経営である。家業を続けるには建物が古く、建て直すには高額な相続税がかかるため、家業をたたみ、当地を売却するという選択をする店舗も出てきている。そのため、個人経営の古書店が減り、チェーンの企業の進出が、神保町らしい古書専門店の街並みが失われつつある。

本研究では、神保町の「B to B の関係の更新」と「B to C の関係の強化」した新しい都市体験が可能な空間デザインを提案することで、神保町の産業の根幹である売買ネットワークの可視化や、古書業界を一般の人に認知してもらうことを目的としている。

2. 研究の方法

本研究では、神保町の地域特性を明らかにするために以下の2つの方法で調査した。

- ① 文献調査
- ② 神保町の将来を考えるワークショップ

3. 神保町の地域特性

3-1. 対象敷地

皇居や神田川に対して北に神保町は位置し、神保町には靖国通り、すずらん通り、



図1 対象敷地

さくら通り、白山通りの4本の特徴のある道路が通っている。今回の設計対象地は靖国通りとすずらん通りの間の6街区である。

3-2. 神保町の歴史と変遷

1857年に洋学所が「蕃書調所」という江戸幕府直轄の洋楽研究教育期間が、九段坂下に建てられたことで神保町が、学生街として成長を遂げることとなった。

私立法律学校の教員は官吏との掛け持ちであったこと、そして苦学生も昼間は官庁で

などで働いていたことが要因で神保町は学生街として発展することとなった。

3-3. 神保町の個性

学生街として栄えたことで、古書店街、中華街、セカンドユース街、印刷業街としての性格を持ち合わさるようになった。

3-4. 東京古書会館の現状

昭和42年の旧東京古書会館のすべての機能が古書組合の為のものだったのに対して「一般の人にも古書業界を知って欲しい。」という意図から情報コーナーや多目的ホールといった新機能が追加されたが、現状は機能していない。神保町の産業の根幹である古本の搬入・搬出が東京古書会館を中心に神保町で行われているのにも関わらず、歩行者からは全く気づかれていないのが課題である。

3-5. 神保町の将来を考えるワークショップ

神保町の魅力向上と将来イメージの検討に役立てるため、ワールドカフェ方式で神保町の書店や飲食店などの地域関係者を対象に行ったワークショップである。このワークショップからモノ消費からコト消費へ変化していること、神保町にくつろげるスペースを増やして欲しいというニーズが高いこと、そしてインターネットの普及により、回遊性が低下し、キャラクター性が求められるように変化したことが分かった。

3-6. まとめと考察

以上の調査から下記の4つを意識して空間提案する。

- ① 神保町の産業の根幹である古書の売買ネットワークを可視化させ、神保町の個性をより強固なものにする。
- ② 古書巡りを通じて得られる古書店主との交流体験をより魅力的にする事が大切であると考え、この交流体験を充実させる事でコト消費を充実し、B to C の関係の強化につなげる。古書店主の趣味から交流が生まれ、古書店主を通じて「古書巡り」に興味を持ってもらうきっかけに繋げられるような空間を提案する。
- ③ カフェには様々な人を受け入れるポテンシャルを持っていて様々な活動が行われている神保町の中で「のりしろ」的な役割を果たすと考える。そこでSNSなどで事前に調べてお目当てのカフェに行く人も、本来の黄金

ルートで回遊している人も全ての人が古書空間を通るように提案する。そうすることで、古書文化とカフェ文化、どちらも守ることができるのではないかと考える。

- ④ 神保町には様々なキャラクターがあるが、どれも融合することなく独立して存在しているため、その壁を取り払い、神保町には様々なキャラクターを融合させて回遊させた提案を行う。

また、1冊の本から生活の幅が広がっていく喜びを体感して欲しいと考えている。そのために1冊の本と必ず出会って、活動や次の本へとつながっていくような導線とシステムを提案する。

4. 計画案

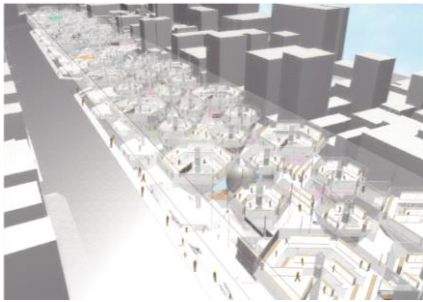


図2 全体パース

4-1 コンセプト

今回の目的として古本を売買するだけの場ではなく、知識に対する好奇心を刺激して、活性化させ、能動的に活動する場になって欲しいと考え、

「伝う」というコンセプトのもとに空間をデザインした。

4-2. コンセプトから連想された空間イメージ

氷柱とは一定の温度が保たれず、寒さと暖かさの変化で、溶解と凝固を繰り返してなされる自然現象である。知の氷柱は図2のように古書店主の意思や神保町で活動する人々の知的好奇心によって知識を深めるかのように下へ伸びながら太く成長していくイメージで空間提案した。

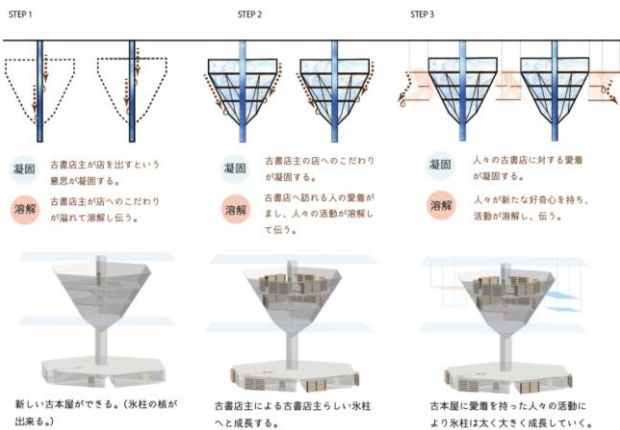


図3 知の氷柱空間の育ち方

4-3. 空間構成

空間構成としては図3のように大きく4つのプログラムで構成されている。1つ目は氷柱空間内で広がっている古書店エリア。2つ目は氷柱と氷柱の間の余白である滲み出

し空間で拡張していく古書店主と活動を結ぶエリア。3つ目は1Fに位置し、古本に興味ない人でも古書店主と交流するきっかけとして機能する古書店主の趣味のエリア。4つ目はB1Fに位置する古書の売買ネットワークを可視化させている古書の売買ネットワークエリアである。



図4 4つのエリア区分ごとの空間構成

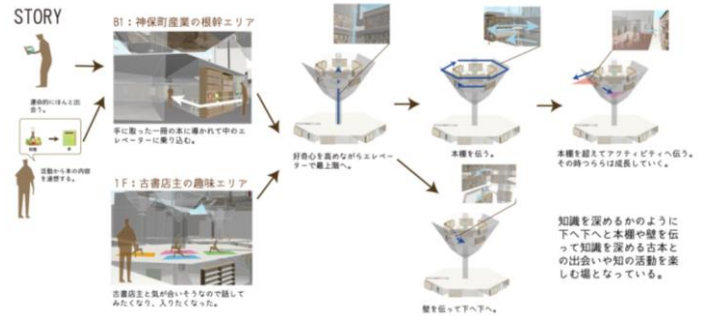


図5 知の氷柱の伝い方

図5のようにB1Fの古書の売買ネットワークエリアで出会った1冊の本、または1Fの古書店主と活動を結ぶエリアで古書店主と出会ったことがきっかけで知的好奇心を高めながらエレベーターで最上階まで登り、本棚を伝いながら下へ下へと知識を深めていく。そして氷柱空間から知の活動が溶解し、知のコンテンツが滲みでる。こうして人々の知に対する能動的な活動が神保町の古書空間を育てていく。

5. 結論

神保町の古書店街はただ古本を売買するだけの場ではない。知識に対する好奇心を刺激して、活性化させ、能動的に活動する場であると捉えた。

今回提案した知の氷柱は、知識を深めるかのように下へ下へと人々の活動が氷柱のように太く伸びていく。こうして神保町の古書店街は人々が好奇心を失わない限り、新たに成長を遂げていく街となる。

このように人々の知識に対する好奇心で育つ場こそが世界最大の古書店街である神保町にふさわしい空間なのではないだろうか。

注

1. 茂野夏実, "近年の神保町古書店街の変容と将来に関する意向", 明治大学院修士論文, 2018年

参考文献

- 1) 鹿島茂, 「神田神保町書肆街考」, 筑摩書房, 2017年
- 2) 初山真人・渡邊貴介・羽生冬佳, "東京23区における専門書店街の形成過程に関する研究", 都市計画学会論文集, Vol. 35, p373-p378, 2000年
- 3) 東京都古書籍商業協同組合, 「東京古書組合50年史」, 東京都古書籍商業協同組合, 1974年